

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 28 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370319

研究課題名(和文) ニューイングランド超絶主義者たちにおける国民文学意識の研究

研究課題名(英文) A Study of National Literature Consciousness of New England Transcendentalists

研究代表者

松島 欣哉 (Matsushima, Kinya)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：20165814

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)： アメリカ独自の文学を求める声は、政治的独立を勝ち得た1783年の直後から辞書編纂者のノア・ウェブスターによって発せられ、その後、政治家や医師など様々な人々によって繰り返されたことを明らかにした。

イギリス人たちによる創成期のアメリカ文学を中傷する発言に対し、牧師ウィリアム・エラリー・チャニングは貴族主義的国民文学を、超絶主義者エマソンは「アメリカの学者」等により自己信頼に基づく国民文学を、オレスティース・A・ブラウンソンは民衆の民主主義を表現する文学の確立を、マーガレット・フルーは人種・性差を越えた民主的文学の創出を呼びかけ、超絶主義者たちが国民文学の発展に寄与したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： An appeal for literary independence in the United States was made by Noah Webster immediately after its political independence, and it was repeated by not only literary men but also politicians.

When English literary critics disparaged nascent American literature, Americans showed various responses. William Ellery Channing, a Unitarian minister, called for the rise of aristocratic national literature; Ralph Waldo Emerson, a transcendentalist, put an emphasis on independent national literature based on self-reliance; Orestes A. Brownson, a transcendentalist minister, argued that national literature should be based on people's democratic spirit; and Margaret Fuller, another transcendentalist, required people to develop national literature beyond gender and race. Thus transcendentalists contributed greatly to the development of American national literature in the first half of the nineteenth century.

研究分野：人文社会系、人文学、文学、英米・英語圏文学

キーワード：国民文学 超絶主義 ニューイングランド

1. 研究開始当初の背景

(1) 私はこれまで Thoreau の研究をしてきたが、Emerson が、*Dial* (1840)の創刊の辞で新しい思想を表現する雑誌の刊行をおこなうのだと高らかに宣言する前に、聖職者であり超絶主義者でもある William Ellery Channing が、“The Importance and Means of a National Literature”と題する評論を1830年に発表しているのを見つけ、さらに、聖職者であり超絶主義者でもある Orestes Brownson が、国民文学 (national literature) を論じ、Edward Everett や Margaret Fuller も「アメリカ文学」を論じているのを知り、彼らの論を検証することは、Emerson や Thoreau の文学意識を考察する際、欠かすことができないことに思い至った。

(2) また、アメリカにおける国民文学を求める声の研究が日本においては未だなされていないことに鑑み、それを行う必要性を痛感し、その研究も含めることにした。

2. 研究の目的

(1) アメリカに於ける国民文学を求める声は、既に18世紀の終わり近くから発せられていたことを、Merle Curti が指摘していたが、本研究の第一の目的は、具体的に誰がどこでそれを発したかを明らかにし、それに続く人々の発言を特定することである。

(2) 本研究の第二の目的は、アメリカが独自の文学を花開かせる19世紀中葉、いわゆるアメリカ・ルネッサンスの時代までに、その一翼を担った超越主義者たち、特に周辺の超絶主義者たちが国民文学意識の形成にどのように貢献したかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、研究対象者による一次資料 (紙媒体および電子媒体の著作) および研究者による二次資料 (紙媒体および電子媒体の著作) を基にした、文献研究である。

(2) 辞書編纂者の Noah Webster の著作を渉猟し、彼がどこで独立した国民文学を求める声を発したかを特定する。

(3) 政治家の Fisher Ames の国民文学に関する評論を読み、彼の国民文学に対する考えを明らかにする。

(4) 医師の Walter Channing の国民文学を求める評論を読み、彼の国民文学論を明らかにする。

(5) イギリス人批評家の Sydney Smith によるアメリカ文学批判を検証する。

(6) ユニテリアン派の牧師の William Ellery Channing の国民文学に関する評論およびその他を読み、彼の国民文学に対する考えを明らかにする。

(7) 超絶主義者の Ralph Waldo Emerson の著作を読み、彼の国民文学論の概要を確認する。

(8) 超絶主義者の牧師の Orestes A.

Brownson の著作を読み、彼のエマソン論と国民文学論を明らかにする。

(9) 超絶主義者の Margaret Fuller の著作を読み、彼女の国民文学論を検討する。

4. 研究成果

(1) 辞書編纂者の Noah Webster は、アメリカが正式に独立を果たした1783年に出版した *A Grammatical Institute of the English Language* の第一部の序文で、「この国は、将来文学上の発展の優越性によって名を馳せるにちがいない、すでに世俗的および宗教上の制度の自由によってそうであるように」と書き、アメリカ人を勇気づけたが、1788年には、彼が編集していた雑誌 *American Magazine* に掲載した “On the Education of Youth in America” において、「アメリカ人よ、心の枷を取払い、独立した人として振る舞え」と、祖国イギリスからの精神的束縛を脱し「知的独立」を果すよう、熱っぽく唱えている。これはエマソンが “The American Scholar” (1837) でアメリカの若者に同様のことを鼓舞する50年前のことであった。この指摘は、これまで日本のアメリカ文学界では言及されていない。

(2) Cyrus R. K. Patell は、アメリカ文学を論じた最初期の文献として、政治家の Fisher Ames の “American Literature” (1803) を挙げている。エイムズは、アメリカ人の著作においてはヨーロッパに現れた天才に匹敵する人物はまだ見当たらないと指摘したあとで、「有能な者たちからなる貴族階級を禁ずることがまさしく (中略) 民主主義国家の精神なのだ」と、アメリカに天才が輩出しない原因を民主主義政体そのものに求めた。彼は、政治上の民主主義の発展がそのまま文学・文化の発展に資すると信じる多くのアメリカ人の考えとは異なる見解を示したのであった。

(3) ハーヴァード大学で助産学の講師をしていた Walter Channing は、1815年に創刊された *The North American Review* の第1巻第3号に、“American Language and Literature” を投稿し、国民文学は「国語」 (“national language”) の正統な所産であるとの論を展開したあとで、アメリカで文学が発展しない原因を「ほぼあらゆることに関連して似ても似つかぬ国 [イギリス] と同一の言語を所有している」ことにあるとし、アメリカ語の創造の必要性を説いた。さらに、文学の独創性という観点から、一国民がその「国民的特異性」を所有し慈しむことが欠かせないと、アメリカ的特性の涵養を力説したのである。

(4) 1812年戦争の終結以降とくに激しさを増した、イギリスの雑誌とアメリカの雑誌との間のいわゆる「紙の戦争」における非難・中傷合戦のなかで、特にアメリカ人の神経を逆撫でしたのは、*The Edinburgh Review* の創設者の一人でもある Sydney Smith が

1820年1月号に掲載した書評において、「独立してから30年あるいは40年のあいだ、彼ら[アメリカ人]は科学のためにも、人文学のためにも、文学のためにも、あるいは政治学や政治経済学のためにさえ、まったく何もやってはいない。(中略)一体この世界中で、誰がアメリカ人の本を読み、アメリカ人の芝居を見に行き、アメリカ人の絵画や彫刻を見えるというのか。」と、アメリカ文学・芸術を酷評したときであった。このような状況のなかで、Edgar Allan Poeが揶揄したように、一時期、アメリカ文学はアメリカ的テーマしか扱ってはならぬといった偏狭なナショナリズムが優勢となった。

(5) ユニテリアン派の牧師 William Ellery Channing は、*The Christian Examiner* の1830年1月号に、彼自身の国民文学論を掲載した。ここで彼は、政治家の Charles Jared Ingersoll がイギリス人たちの非難に対する反論として発表した “Influence of America on the Mind” (1823) に対する書評のような型を取って、持論を展開した。チャニングは国民文学を発展させるには、インガソルが誇った、アメリカに於ける中等教育の普及と実用的知識の蓄積では不十分で、「高貴な知識人仲間」である「天賦の才を授かった少数者」を育成することが必要だ、と主張したのだった。チャニングの「国民文学論」は貴族主義的であると同時に、この時代の国家主義的傾向も示している。チャニングが国民文学を求める時代精神に竿さして貴族主義的文学論を展開した背景には、Andrew Jackson に率いられた一般大衆のエネルギーにより気圧された従来の支配階級に対し、外国に対抗できる知的活動の主体が彼ら自身であることをもう一度自覚させる意図があったと思われる。

(6) 1836年に匿名で出版した *Nature* の冒頭において、「何故我々は、伝来のものではなく、直感の詩と哲学を、祖先の宗教の歴史ではなく、我々に啓示された宗教を、持たないのであるか。」と人々に迫った超絶主義者の Ralph Waldo Emerson は、翌1837年に、ハーヴァード大学のファイ・ベータ・カップ学友会で、のちに「アメリカの学者」として知られる講演をおこなった。ここでエマソンは、「我々の依存の時代、他国の学問に対する我々の長い徒弟時代は、終わりに近づいています。(中略) 詠われねばならぬ、また自ら詠いだす事件や行為が興っているのです。」と、アメリカ独自の知的活動の所産を産み出す必要性を強調した。

アメリカ文学の独立を論じる際にエマソンの「アメリカの学者」のみに光が当たるのは、Oliver Wendell Holmes が、エマソンの伝記 *Ralph Waldo Emerson* (1884) のなかで、「アメリカの学者」の講演を回想し、「この偉大な講演は我々の知的独立宣言 (intellectual Declaration of Independence) だった」と言ったことによる。

しかし、これまで見て来たように、ノア・ウェブスターが「アメリカ人よ、心の枷を外し、独立した存在として行動せよ」と要請して以来、多くのアメリカ人がその必要性を感じ、特に1820年のシドニー・スミスの「誰がアメリカ人の本など読むものか」との非難以降は、文学界にその傾向が顕著になっていた。ホームズは伝記のなかでこの講演を聞いた時の高揚感を思い出して「知的独立宣言」という言葉を使ったのだが、その7年後に書かれた *Over the Teacups* (1891) においてエマソンに言及したときは、「文学上の独立宣言 (Declaration of Literary Independence)」と修正し、エマソンは旧世界の学問の伝統全てから自分を断ち切った訳ではないと批判している。しかし、このことは日本のアメリカ文学界はもちろん、アメリカの文学研究に於いても無視されている点である。

(7) 一時期、超絶主義者の牧師であった Orestes A. Brownson は、エマソンが『自然論』と「アメリカの学者」を発表したとき、彼を擁護したが、1838年7月にエマソンがダートマス大学でおこなった “Literary Ethics” と題する講演に関しては、彼が編集する雑誌 *Boston Quarterly Review* の1839年1月号で、厳しく批判した。エマソンがアメリカ人の物質主義を非難したのに対し、ブラウンソンは、まず生活を安定させることが第一なのだから、アメリカ人の精神が物質面を向かざるを得なかったのは当然だと擁護し、また、物質的欲求が満たされれば、次は魂の欲求を満たすことに同じように熱心になろう、と楽観論を述べた。この講演でエマソンは学者個人の自己信頼とオリジナリティーの重要性を強調したが、それに対しブラウンソンは、「[文学は] 国民生活の表出であり具現だ。その性格はあれこれの一個の人間ではなく、国民精神によって決定される」と述べた。エマソンがアメリカ文学の成立を個人の精神の発現に見たのに対し、ブラウンソンはアメリカの一般大衆の意識の表現に見たのである。ブラウンソンは、1839年9月にブラウン大学でおこなった講演では、「国民文学を創造する者は、その国民の精神に充たされていなければなりません、国民の願望、希望、恐れ、感情などの具現者でなければなりません。(中略) 従って、アメリカ文学の創造者は民主主義者でなければなりません。(中略) 民主主義に対して、政策上からではなく、心から、民主主義に対する真の愛情から、そしてその本質を十分理解した上で、賛同する者だけが、アメリカ文学の前進のために尽くすことができるのです。」と、民主主義とアメリカ文学とを直接結びつけて論じた。これは、のちに Walt Whitman の *Democratic Vistas* (1871) に引き継がれることを指摘した。

(8) 超絶主義者の Margaret Fuller は、エマソンたち超絶主義者が機関誌 *Dial* を発刊したとき、1840年から2年間、初代の編集

長を務めた。フラーは *Summer on the Lakes, in 1843* (1844) において、移民の農夫やインディアンといった社会的弱者に暖かい目を向けている。そして詩人に対し、「詩をすっかり犠牲にしてもこれらの職 [木こりなど] の一つを描かなければならない。労働者は彼が稼ぐ金を産み出す真のミダス王なのだ。画家がイタリア人の小作農の少女やデンマーク人の魚売りの女を、美を付け足し汚れを省いて描くように、詩人も描かなければならない。」と、アメリカ人詩人の詠う対象が「一般人」(common men)であることを提示している。

フラーは “American Literature” (1846) の冒頭で、「[アメリカ文学]が存在しうようになるには、ある独創的な観念がこの国に生命を吹き込み、新鮮な生命の流れがその国土に新鮮な思想を呼び起こさなければならぬ」(122) と述べ、アメリカ文学がまだまだ確たる存在とは言えないことを認める。そして、既に名声の確立した Henry Wadsworth Longfellow の世間一般の評価を退け、ヨーロッパ文学の模倣家として低く評価するのは対照的に、無名の詩人 William Ellery Channing (上記の牧師の甥) の詩に関しては、「それぞれの行と思想は、きわめて真剣な生活と思索をしたあとになって、真剣な観照に値し満足を与えるものであることがわかるであろう。」と、最大の賛辞を贈っている。フラーは有名無名にかかわらず、真摯に人生と向き合った詩人の詩を高く評価し、このような詩にアメリカ文学の未来を見ているのである。

(9) 本研究が明らかにした点の国内外の位置づけと今後の展望

アメリカ文学の独立を論じる際に、国内外において、エマソンの「アメリカの学者」(1837) のみに光が当たる状況を是正した。

アメリカの国民文学を論じる人々が、文学者だけでなく、政治家・牧師・医師等、広い人々の関心であったこと、その結果、エリート主義的論調と民主主義的論調があったので、アメリカ人の国民文学意識が当時の政治的状況と如何に関連していたのか、今後研究する必要がある。

本研究は主にニューイングランドの超絶主義者たちの国民文学意識を研究したものであったが、同時期のニューヨークを中心としたいわゆる「若きアメリカ」と譚名される文学集団の国民文学意識との比較研究をする必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

松島 欣哉、超絶主義者たちと国民文学、中・四国アメリカ文学研究、査読有、第 53 号、2017、14-17

松島 欣哉、アメリカ国民文学意識の発展 — ノア・ウェブスターからマーガレット・フラーまで、香川大学教育学部研究報告 第 1 部、査読無、第 147 号、2017、139-152

松島 欣哉、ウィリアム・エラリー・チャニングの国民文学論、ヘンリー・ソロ研究論集、査読有、第 41 号、2015、21-30

松島 欣哉、ウィリアム・エラリー・チャニングの「自己修養論」、香川大学教育研究、査読無、第 12 号、2015、79-90

〔学会発表〕(計 3 件)

松島 欣哉、超絶主義者たちと国民文学 (シンポジウム: アメリカ文学の独立) 中・四国アメリカ文学会、2016.6.12、広島経済大学 (広島県)

松島 欣哉、Orestes A. Brownson のエマソン批評、日本ソロ学会、2015.10.9、京都外国語大学 (京都府)

松島 欣哉、William Ellery Channing のアメリカ文学論、日本ソロ学会、2014.10.3、北星学園大学 (北海道)

〔図書〕(計 1 件)

松島 欣哉 他、柴田昭二先生退職記念事業会、柴田昭二先生御退職記念論文集、2016、112 (43-56)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松島 欣哉 (MATSUSHIMA, Kinya)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号: 20165814

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()